

百姓・字根豊と
考える農の哲学

下

殺さずに食べることはできるか

もくじ

1 食べものは、生きものだよね

21

1話

「食べもの」が「生きもの」だということを
忘れないのはなぜ？

22

2話

食べるときの殺生を悩まずに済むのは、どうしてか？

24

3話

「ごはん」の中に詰まっているものは何？

27

4話

「どこでとれたの」と尋ねる習慣は
なぜ生まれたのか？

30

5話

食べものが「季節」を伝えてくれるのはなぜかな？

32

6話

「いただきます」は、何に、
誰に向かって言っているの？

34

7 話

食べものは食べる前に、
神棚や仏壇に供えていたのはどうしてか？

37

8 話

「培養肉」や「クローン家畜」で、
私たちは何を失うのだろうか？

39

9 話

「ベジタリアン」も植物の「いのち」は
奪っているのではないか？

42

2

食べもののいのちと
人間のいのちは同じなの？

47

1 話

なぜ、生きていることは
「いのち」があると言うのだろうか？

48

2 話

どうして「いのち」という命名はすごいのか？

51

3話

「ほんとうに自分の（人間の）「いのち」と
生きものの「いのち」は同じものか？

54

4話

「草にまた会える」という感覚は、
どこからくるのか？

57

— COLUMN —

「日本では遅れている
「動物の福祉」の取り組み

61

5話

百姓ならではの

「いのち」のとらえ方とはどういうもの？

64

6話

「土になる」ではなく「土にかえる」と言うわけは？

67

3

「アメツチ（天地）」って、いったい何？

71

1話

「アメツチ（天地）」が
身近なものになったのはなぜか？

72

2 話 「アメツチ」という言葉は、
農耕によってどう変わったのか？

77

3 話 アメツチに「有用なもの」「無用なもの」の
区別はあるのか？

81

4 話 「アメツチ」と「自然」の違いとは？

85

4

生きものを相手にするって、
いいものなの？

89

1 話 「センス・オブ・ワンダー」をなくした先は？

90

2 話 「アニミズム」という言葉は、なぜ復活したのか？

95

3 話 なぜ人間の身体の名前と、草木の名前は同じなのか？

99

4話

名前を付ける方法と気持ちは
どういうものだったのか？

103

5話

なぜ「人は、もともと草だった」
という言い伝えがあるのか？

106

6話

「草木」へ「生まれ変わりたい」という願望は
どうして生まれたのか？

109

7話

「生きもの」には、
ほんとうに「タマシイ」があるのか？

113

8話

「生きものの語り」を
復活させることはできないか？

117

— COLUMN —

稲の花の「生きものの語り」です！

122

9話

百姓の「風景」の見方は、なぜ独特なのか？

125

5 生きものたちの悩みがわかるかな？ 131

1話

田んぼの生きものたちはなぜ
減ってしまったのだろうか？ 132

— COLUMN — 「田んぼの生きもの全種リスト」と

夜空の星たち

138

2話

「生物多様性」という言葉から
こぼれ落ちるものとは何だろうか？ 142

— COLUMN — 「多面的機能」に決定的に欠けているもの 146

— COLUMN — 「メタンガス」削減のまやかし 149

3話

「花」に惹かれるのはどうしてか？ 151

4話

なぜ「花」を手折って持ち帰らなかったのか？ 154

6

天地有情って
どういう感覚なんだろう？

161

1話

共同体って人間だけのつながりだと思う？

162

2話

田んぼに毎日通いたくなるのはなぜか？

165

3話

百姓仕事か風物詩になったのはなぜか？

168

4話

「はかどる」の「はか」って何？

171

5話

休み時間って、いったい何なんだ？

175

6話

「生きかはり死にかはりして打つ田かな」
の百姓は、蛙にどう見えるか

179

7話 仕事の長さ^が

世代を超えることはどういうことか？

181

— COLUMN — カミナリと稲妻 183

8話 「カミ」と「神」はどう違うのか？

186

7 人間中心主義を超えられるかな？

191

1話 「人間中心主義」^が

環境破壊の根本原因ってどういうこと？

192

2話 百姓仕事^が「自然保護」と

見なされてこなかったのはなぜか？

196

3話 なぜ百姓は「人間中心主義」になりきれないのか？

200

4 話

日本人が天地自然の外に出ることが
なかったのはなぜか？

204

5 話

百姓仕事は受け身だからいいのではないか？

208

6 話

農で感じた信心（宗教）はなぜ表に出ないのか？

211

7 話

信じることで、救われるのはどうしてか？

215

8 話

百姓は「生きる意味」を考えてはいけない？

218

8

「めぐみ返し」を

あたりまえにできる世の中へ

223

1 話

「所有」「私有」にそぐわないものとは何か？

224

2 話

「食料安全保障」という考え方には
何が欠けているのか？

227

3 話

「農業」は「農（なりわい）」に戻れるか？

231

4 話

「農」を「めぐみ返し」に
転換することはできるのだろうか？

236

5 話

「農の哲学」というものが必要だ

241

おわりに

「語って」おかなければならない

246

百姓・宇根 豊と
考える農の哲学

下

殺さずに食べることはできるか

宇根 豊

はじめに

「いのち」の謎がわかった

大学を休学して、養鶏業をやっていた時期がありました。父が2カ月ほど入院したからです。週に一度、卵をあまり産まなくなった鶏（「廃鶏」と呼んでいました）を40羽ほど処理場に持って行き、殺しました。この仕事だけは慣れることができませんでした。

家畜は殺すときに出血させてしまわないと、血が肉に残って肉質が落ちます。鶏も首の奥にある動脈を切断して、暴れないように並んだ漏斗状の設備に逆さに入れ、血を出しきるのです。いつも、したたる血をじっと見つめながら「なぜ、生まれてくるときよりも、死んでいくときのほうが、いのちを強く感じるのだろうか」と思っていました。

また、百姓をするようになって、多くの作物や虫や蛙や草木の生死を見ることが日常になっても、同じことを感じました。しかし、その理由はずーっとわからないままでした。「死」は「誕生」よりも、「いのち」とは何かということをよく

伝えてくれます。この歳になって、やっとその訳がわかったのです。

人は食べものが生きものだということをよく知っています。ですから、食べることは生きものを殺すことだということもよく知っているはずですよ。ところが、これはあまりにもあたりまえのことなので、普段は意識しません。また、百姓仕事は生きものをよく殺します。たとえば「草とり」は草を引き抜いて殺す仕事ですが、「殺している」と感じたりはしません。どうやら、食べるための殺生と、百姓仕事の殺生は、「殺している」ということを感じないでいい共通の知恵が身につけているのではないでしょうか。それにしても不思議なことですよ。

「一体、これはどうしてだろうか」とずっと考えてきました。そして、一つめの疑問、「いのち」は死ぬときになぜ強く感じるのかと、二つめの疑問、食事や百姓仕事では「殺している」ことをどう乗り越えているかは、百姓が答えるしかないことがわかったのです。

そのきっかけは「農とは何か」と考えはじめたことです。この二つの疑問への答えは、「いのち」とつきあう「農」の本質だったのです。くわしいことは本文で語っていきますが、この二つの問題は人間の宿命で、大きな悩みになってもよかったのに、見事に克服されています。私たちの先祖は、たぶん縄文時代からこの宿命を悩まずに済む方法を、この宿命を楽しむ方法を編み出していたのです。

これは私にとつては、とても嬉しい大発見でした。これに気づいたことが、この本を書こうとした最大の動機です。

さて、と窓の外を見ると、庭でも赤トンボたちが舞っています。暑い夏でしたが、それでも赤トンボは健気^{けなげ}に田んぼで生まれて、いろいろな場所へ飛んでいきます。そして寒くなると姿が見えなくなり、死んでしまいます。多い年には、日本中で200億匹もの赤トンボの「いのち」が群れ飛ぶ国だったのですが、気づかないうちに赤トンボも減っています。

日本政府から「減ってもいいよ」と言われ続けた百姓が減るのは当然ですが、赤トンボに代表される田んぼの生きものも減ってしまったのです。「いのち」の危機がいちばん迫ってきているのは、田んぼの生きものたちのほうです。百姓が減ってしまった危機と、生きものたちの「いのち」の危機はつながっています。

この「いのち」の危機の原因を本気で探さなければなりません。このことと先の「殺生」を悩まずに済んでいる理由はつながっているような気がします。それはこれまでやられてきたように、「外からのまなざし」で社会全体を見渡すだけでは見えてきません。百姓仕事の奥へと、底へと掘り下げていく方法が必要です。そのやり方がまたしても、この歳になってやっと見つかったのですから、つくづく私は恵まれています。

昨年からの「令和のコメ騒動」でもわかるように、コメの価格だけが関心を集めています。コメの価格の高い安いを語ることは、農の語り方として異常だと感じました。コメが生きものであることが、すっかり忘れ去られています。はたして米の価格が2倍になるのは、コメの「いのち」の価値が2倍になったからでしょうか。こういう疑問を抱く日本人は、たぶんほとんどいないでしょう。

コメから「あなたたち人間も、まるでカネで取引されているように見えるよ。労賃とか所得とかで、評価しあっているでしょう」と言われているようで気が重くなります。私たちは、コメという生きものの価値を平気で経済価値で決めるようになっていました。コメは言っています。「むしろ赤トンボや野の花のほうが、経済価値がないから幸せなような気がする」と。私はあわてて「いやトンボや草もカネにならないからといって、辛い目にあっているんだよ」と言います。

朝早く田んぼに行くと、赤トンボが稲の葉にいっぱいぶら下がって、翅の露が乾くのを待っています。耳をそばだてていると赤トンボが私に尋ねてきます。

「私という赤トンボとコメの価値はどのようにつながっているの?」。さらに「私の一生と、百姓としてのあなたの人生とはどういう関係にあるの?」「私たちは時代の価値とは関係なく自然に生きることができるの?」と、次々に問われるのです。

百姓としては、私の疑問、みなさんの疑問、そして生きものたちの疑問に、ちゃんと答えたいのです。そこで懸命に力を振り絞って答えたのがこの本なのです。

食
べ
も
の
は
、
生
き
も
の
だ
よ
ね

「食べもの」が「生きもの」だ
ということをお忘れなのはなぜ？

人間は生きものの以外を食べることはありませんが、塩だけは例外です。もともと塩分を動物の血から摂取している民族もいます。考えてみると、これはとても不思議なことですよ。「動物なら当然のことだ」と言われても、微生物や草木のような生ものありえたりしないのにと、ふと思ったりします。しかし、地球上にまず植物が現われて、その植物に依存する、つまりその植物を食べてこそ生きられる動物が現われたことを考えれば、これは不思議なことではなく、当然の帰結なのではないか。

このことにこだわらざるをえないのは、私たちは生きものを食べることによって、大きな難題を抱え込むことになるからです。その食べる生きもの、いや私たちに食べられる生きものは殺さないといけないのです。ストレートに言ってしまうと、食事とは生きものを殺して食べることです。こう言うのと嫌な顔をする人が少なくありません。

それもそのはず、誰もが食事は楽しみであり、楽しい時間になることを願っているからです。しかし、刺身を食べるときは、殺したばかりのほうが「活きがいい」と平気で言います。私の村でも春になると川を遡上してくる白魚を「躍り食い」と呼んで生きたまま呑み込む食べ方を

今でもやっています。残酷な食べ方ですが喜ばれています。これは、どうということなのでしょう。うか。

どうやら私たち人間は、食べものが生きものだということを知っていながら、食べることが生きものを殺すことだとわかっていながら、忘れたふりをして、食事を楽しむことができるのです。これはすごい習慣だと思いませんか。つまり殺生を悩まないどころか、楽しむことができるのですから、これには深い理由があるはずです。

「食欲は人間の本能だから、それを悩んでいては、生きていけないよ」という弁解は、成り立たないでしょう。たしかに食欲は本能でしょうが、食べることはすでに単なる食欲を満たすことから離れてしまっています。そもそも料理をして、煮炊きはもちろん、味付けから、皿を選ぶことや盛りつけ方、食べたときの表現する言葉に至るまで、本能の発露ではありません。それは経験の蓄積が花開いているのですから、人間が選んでつくりあげた「文化」です。

そうすると、私たちは生きものを殺していることを忘れるための文化を「食文化」として発明した、ということになります。そもそも「料理」とは、生きものの死体をさまざまに切り刻み、味付けして、そして皿に飾りつけ、おいしく食べる「文化」ですよ。

つまり「食事」とは、「生まれながらに備わっている性質や能力を発揮する」本能ではなく、その本能を覆い隠してしまう工夫が花開いたものです。だからこそ、多彩に発展してきたのではないのでしょうか。それはひょっとすると、殺生を悩まずに済ますために過剰に行なっている

儀式ではないかと疑いたくもありません。

「料理」の開始は、40万年前に炉を設けて「火」を利用しはじめたときです。次に7万年前ぐらいに、アフリカで暮らしていたホモサピエンスに生じた「認知革命」によって、人間のものの考え方が大きく変化しました。これは言語使用が格段に発達したからか、遺伝子の変移によるものか、議論は続いています。これ以降、人間はことごとく本能に反したことを行なうようになったのです。農耕の開始や「料理」や食べものをさまざまに「加工」する技の発達もその中に入るでしょう。

しかし、いくら「料理」という文化が花盛りになって隠そうとしても、私たち人間は食べものが生きものだということを決して忘れることはありません。それは、人間ではなく、生きものの「力」ではないでしょうか。生きものが死んでも私たちを呼ぶのです、そして必ずまた会いに来るのです。みなさんも「また食べる」食べものばかり食べているでしょう。

2話

食べるときの殺生を悩まずに済むのは、 どうしてか？

食べものは生きものですから、食べることは生きものを殺すこと（殺生）です。この殺生をたまに悩むことはありませんか。食べることが本能だった頃には、悩むことがなかったのに、

なぜ悩むようになったのでしょうか。これには大きな転機があったのです。

それは狩猟採集時代には「食^べ、^い、^の」だったものが、農耕の開始によって「食^べ、^い、^の」という身近な、生きもの同士になったからではないでしょうか。食べるために殺す、そして殺すために育てるのは、「農」によって本能に別れを告げたからです。そして今では、経験を通して獲得された意図的な行動になっています。つまり、食べるために育てて殺すという大胆な発想は、「農」という経験の最大の発見と言ってもいいでしょう。さらに「どういう殺し方が、おいしいか」というところまで、経験を積み重ねていくのですから、相当に残酷な局面を平気でやり過ぎてきたのです。

「農」という育てて殺す文化は、このような深い悩みを生みだしてしまった以上、これを克服する道をも見いださなければならなくなったのです。私はずいぶん理屈っぽく語っていますが、古代人はそれを直感でわかっていたのでしょう。答えはすぐに見つかりました。

食べるために殺す食事と、殺すために育てる「農」とはつながっています。しかもさらに、この食べるために作物や家畜を殺す、殺すために作物や家畜を育てることは、それだけにとどまりません。上巻でも話したように、百姓はじつによく作物や家畜以外の生きものを殺します、そのことを悩みません。これも答えは同じところにあるのです。

まず、現代の科学では、この悩みに対する解決を「食物連鎖」で説明しています。すべての生きものは何かを食べなければなりません。それは、常に食べられる生きものがあるというこ

とです。植物を食べた小さな動物は、大きな動物から食べられ、その大きな動物もさらに人間などから食べられるということです。つまり人間以外の生きものは、何かに食べられるから、この食物連鎖の中に組み込まれています。だからこそ責められることはないのです。ところが人間だけは、誰からも食べられないことがないようになったので、「食物連鎖」の頂点に立っている、というわけです。これは結果を説明しただけですから答えにはなっていません。

私も含めて多くの人は、「生きていくためには仕方がない」と自分に言い聞かせて、生きものを殺していることに目をつぶります。かつての仏教の信者は、せめて動物の肉だけは食べないようにして、少しでも殺生を少なくするようにしましたが、植物のいのちまでは、奪わないわけにはいきませんでした。現代のベジタリアンもそうです。

これは、とてもとても難しい問題ですが、答えは「農」の底のほうにあります。

「農」とは、生きものたちとまた田畑で会えるから成り立っています。その「また会える」生きものとは、野外だけではなく、食卓でも「また会える」のです。

百姓は毎年タネを播きます。当然のことです。なぜ毎年なのでしょう。なぜなら食べることは毎年続くからです。一度きりで終わるわけにはいきかないのです。「農」とはくり返すことを宿命づけられているのです。それは毎年殺すことをくり返すことです。しかし、今年殺しても、来年また耕しタネを播き、そしてまた殺した生きものに会えるのです。この「また会える」ために、耕しタネを播くのが「農」というもののなのです。それは毎年毎年殺して食べるた

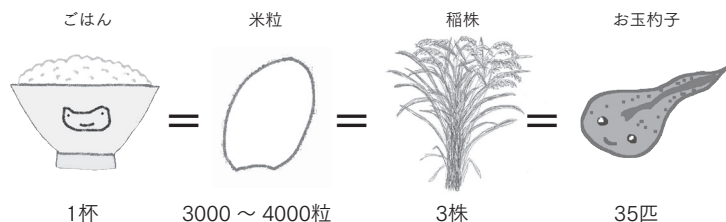


図1 人間とごはんと生きものの関係

めにしていることを忘れさせてくれます。
このことがどんなにすごいことなのかを、これから語っていきま
しょう。

3話

「ごはん」の中に
詰まっているものは何？

上の絵を見て、何を感じますか「図1」。この絵は、私が描いた下手な
絵で、下敷きの絵の凡例なのです。この下敷きは「食べもの（生きも
の）を食べることは、生きものとどういう関係にあるか」を伝えるた
めに作成し、ベストセラーになっています。さあ、この絵を読み解い
ていきましょう。

絵の説明は簡単です。「ごはん茶碗1杯」は、「米粒30000〜40
00粒」です。これは「稲株3株」分の米です。ここまでではすぐにわ
かるでしょう。ところが問題はその次です。ここになぜ「お玉杓子
35匹」が登場するのでしょうか。じつは、この絵には、ほかにミジ
ンコだったら5093匹、豊年エビオウネンだったら11匹、跳び虫オタマジャクシだったら32

匹、蜘蛛だったら10匹、逆に秋アカネだったら1匹でごはん3杯、沼蛙だったら6杯、源五郎類だったら13杯、井守^{イモリ}だったら1802杯、燕^{ツバメ}だったら4500杯などと、イラストで描かれています。

私は小学校5年生に、この下敷きを配ってこう問いかけることにしています。「もし君たちがごはん1杯を食べなかったら、稲3株がいらなくなるだろう。そうしたら、そのまわりで生きていたお玉杓子はどうなる？ 生きる場がなくなつて死ぬしかないだろう。ということは、ごはん1杯を食べないということは、お玉杓子35匹を殺すことになるんだ」。子どもたちから一斉にブーイングが起きます。「言いすぎだろう。今朝はパンを食べてきたけど、お玉杓子を殺しているとは感じなかったよ」と。そこで私もあわてて言い直します。「でも、こう考えてみてごらん。君たちが1杯のごはんを食べるから、稲と一緒にお玉杓子やミジンコや赤トンボや源五郎が田んぼで生きることができんだ。君たちと田んぼの生きものたちはごはんを通してつながっている生きもの同士なんだ」。

すると子どもたちは、「そう言われると、悪い気はしないけど、実感がわかない」と正直に反応します。たぶん大人もそうでしょう。

もし、農の本質を「食料生産」だと言うなら、米を生産して、人間に届けておしまいになるでしょう。ところが農はもう一つの世界を切り開いたのです。食べものという生きものを育てることは、同時に食べものでもない生きものもまた育ててしまうことに気づいたのです。なぜ

なら、天地自然は食べものとなる生きものだけを育て、めぐみとするのではなく、一緒に多くの生きものたちもまためぐみとしてもたらししてくれるからです。

食べものは生きものです。その生きものを食べることは、その生きものが育った天地自然とつながることなのです。そして、その天地自然の中で、多くの生きものともまたつながってしまうのです。

食卓の上で、私たちを見ているのは、米粒だけではありません。お玉杓子も、源五郎も、赤トンボも、燕も私たちを見ているのです。なぜなら、米ができる、とれるということは、そういうものだからです。それが見えなくなってしまったのは、「農業は食料生産だ」という近代的な狭い価値づけに私たち百姓まで浸食されてしまったからです。

人間も生きものとして、田んぼで育った稲（こはん）を食べて、天地自然の中で生きています。が、同時にお玉杓子も源五郎もトンボも燕も、それぞれの食べものを食べながら私たちと同じ天地自然の中で生きているのです。「食料生産」は決して人間のためだけにこなわれているのではない、とこれらの生きものは口をそろえて言っています。それが食卓のもう一つの賑わいというものです。